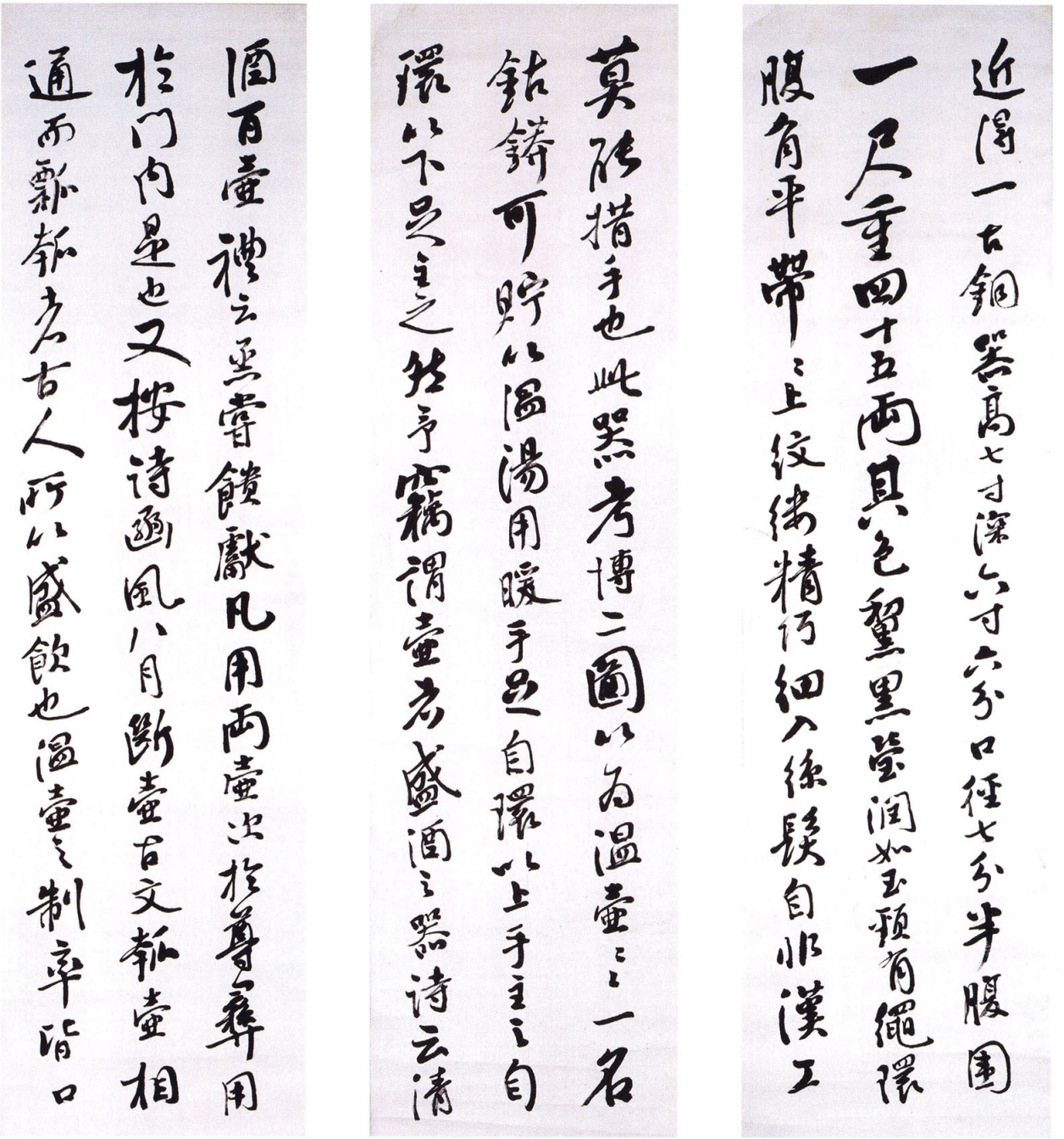


52 温壺引書（温壺考）

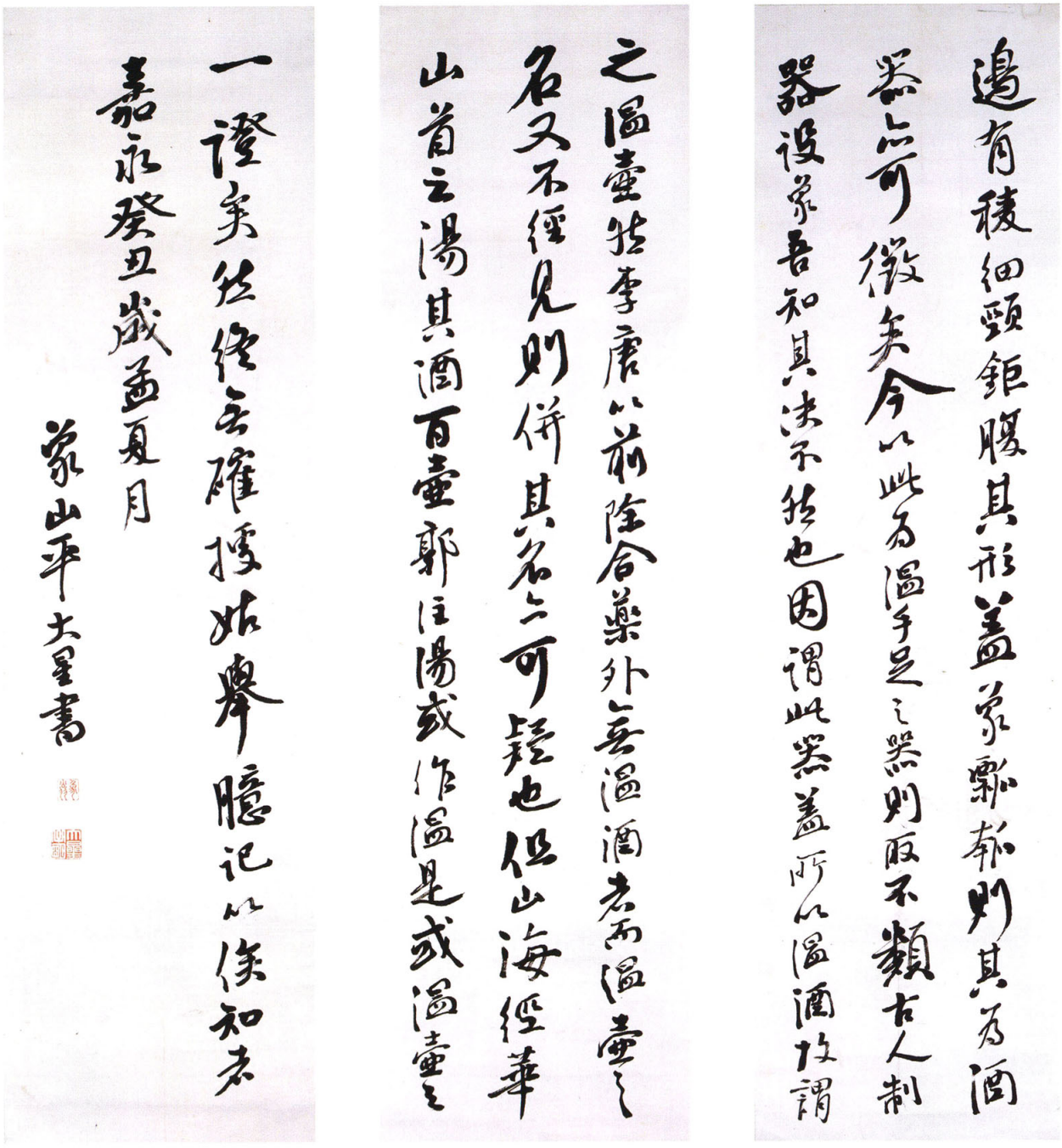
佐久間象山
六幅〔三の丸尚蔵館〕
紙本墨書　本紙一一〇・二×二九・六
江戸時代、嘉永六年（一八五三）

佐久間象山（一八一一～六四）は、松代藩主真田幸貫の側右筆（そばゆうひつ）などを務めた佐久間国善（一学）の長男として生まれた。幕末の思想家であり洋学者、開国論者としてもよく知られている。象山は家督を継ぐと江戸へ出て佐藤一斎に師事し儒学を学んだ。

藩主である幸貫が老中に任じられると、象山は海外事情の研究を命じられ、海防の問題に専心するようになる。嘉永四年（一八五一）には江戸木挽町に私塾を開き、勝海舟や吉田松陰なども学んだ。同六年六月のペリー来航に際しては西洋事情の探索などを求めるが、翌年門弟の吉田松陰に密航を勧めたかどで、国許（くにもと）での謹慎を命じられる。

九年間の謹慎を経て、元治元年（一八六四）に幕命を受けて上洛し、一橋慶喜や皇族・公卿の間を奔走した。しかし同年七月十一日、山階宮（やましなのみや）邸へ伺候した帰途に尊攘派に襲われ落命した。

この〈温壺引書〉の六幅対は、末尾に「嘉永癸丑歳孟夏月」とあり、ペリー来航直前である嘉永六年四月の筆であることがわかる。ここでは、象山が最近入手した「温壺」と称する古銅器についての見解を記している。冒頭には「温壺」の寸法、色などの概要が述べられ古例を引きながら、「温壺」は手足を温めるものだと記している。一方で象山自身は、酒を盛る器ではないかとも考えたようで、こち



遏有稜細頸鉅腹其形蓋象鄭都則其為酒器亦可徵矣今以此為温手足之器則取不類古人制器設象吾知其決不然也因謂此器蓋所以温酒故謂之温壺然李賡以前陸合藥外言温酒者而温壺之名又不經見則併其名之可疑也但山海經華山首之湯其酒百壺郭注湯或作温是或温壺之一證矣然終未確授姑舉臆記以俟知者

嘉永癸丑歲孟夏月

象山平大星書

らも古例を挙げながら考証を加えており興味深い。末尾には、これらは確たる証拠は無いので知者を待つ、と記されている。象山の知的好奇心の広さがうかがわれる。

（釈文は118頁参照）

・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

書の美、文字の巧

三の丸尚蔵館展覧会図録No.74

編集　宮内庁三の丸尚蔵館
　　宮内庁書陵部
制作　株式会社　東京美術
翻訳　黒川廣子
発行　宮内庁
平成二十八年九月十七日発行

© 2016, The Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shozokan
The Archives and Mausolea Department
Imperial Household Agency